

「言う」の発音に関する研究

著者	尾崎 喜光
雑誌名	清心語文
号	19
ページ	82-64
発行年	2017-11
URL	http://id.nii.ac.jp/1560/00000174/

「言う」の発音に関する研究

尾崎喜光

1. はじめに

学生たちの会話を脇で聞いていると、新しい表現に気づくことがときどきある。

昨年のことであったが、ある学生が教室で別の学生に対し、「そうは言わない」を「そうはゆわん」と言っていることに気づいた。岡山県を含む西日本では、打消しの助動詞として「ない」や「ねー」はあまり使わず、古典語の「ぬ」に由来する「ん」が主流であることは東日本出身の筆者も承知していたが、ここでの問題はその直前の動詞「言う」の語幹「言」の発音である。すなわち、「いわん」ではなく「ゆわん」と発音していたことに筆者は反応したのである。西日本では「いわん」だとばかり思っていたところ、「ゆわん」と発音していることに気づき驚いたわけである。

関連する現象として「さっきそう言った」の「言った」を「ゆった」と発音することがある。西日本では、「言った」はウ音便の「ゆうた」が本来であるが、現在は共通語も使われていることから、共通語の「いった」を取り入れる際に、語幹を西日本風に「ゆ」としたのではないかと推測したが、共通語においても「ゆった」は日常的に使われているようである。

そこで、現在の岡山県において、また共通語において、動詞「言う」の諸活用形における語幹「言」の発音がどのようになっているかについてその一端を明らかにするために、岡山県についてはアンケート調査を（実際の対象は岡山市）、また共通語については過去に放送されたテレビドラマのセリフの調査を行った。このうち後者の調査では、番組が過去数十年にわたり断続的に放送された同一のドラマを対象とし、時代による変化の有無や、俳優の個人内での変化の有無をもとらえようとした。本稿はその分析結果の報告である。

2. 岡山市でのアンケート調査

岡山市でのアンケート調査は、一般の成人を対象とする調査と、女子大学生を対象とする調査からなる。

2.1. 回答者

(1) 一般成人を対象とする調査

岡山市のある民間団体が定期的に行っている勉強会において、2017年2月に筆者が講話をする機会を得た。その参加者を対象にアンケートを実施させていただいた。回答者には、地元の名士や伝統的な専門技術を持った人など、社会的地位が高い人が少なからず含まれていた。

回答者は34人であった。属性別集計は次のとおりである。

性別：男性 20 人、女性 14 人。

年齢層：40 代 2 人、50 代 0 人、60 代 14 人、70 代 15 人、80 代 3 人。

現住地：岡山市 31 人、倉敷市 2 人、玉野市 1 人。

出身地：岡山県 24 人（岡山市 15 人、倉敷市 3 人、その他 6 人）、東京都 4 人、広島県 3 人、その他 3 人。

最長居住地：岡山県 27 人（岡山市 23 人、倉敷市 3 人、その他 1 人）、東京都 3 人、その他 4 人。

これによると、岡山県（とりわけ岡山市）を地理的背景とする 60 代～70 代、性別についてはどちらかというと男性が回答者の中心であった。

（2）女子大学生を対象とする調査

筆者が勤務校で担当する「日本語学演習」では、授業の一環としてオムニバス調査（設問持ち寄り式のアンケート調査）を、履修者とともに毎年行っている。アンケートの回答者は、やはり筆者が担当する「日本語史Ⅱ」の履修者（主として大学 2 年生）である。2016 年度の調査では、調査項目の一つとして「言う」の発音を含めた。調査は 2016 年 12 月に実施した。アンケートの配布・回答・回収は授業時間の一部を使って行った。

回答者は 87 人であった。回答者は全員女性で、ほとんどは 20 歳前後である。出身地と最長居住地は次のとおりであった。

出身地：岡山県 63 人（岡山市 29 人、倉敷市 15 人、総社市 5 人、笠岡市 5 人、その他 9 人）、広島県 5 人、香川県 4 人、兵庫県 2 人、その他 9 人、無回答 4 人。

最長居住地：岡山県 68 人（岡山市 33 人、倉敷市 17 人、総社市 5 人、笠岡市 4 人、その他 9 人）、香川県 6 人、広島県 4 人、兵庫県 3 人、その他 2 人、無回答 4 人。

これによると、地理的背景については、岡山県（とりわけ岡山市、次いで倉敷市）が 7～8 割と多くを占めるデータであることがわかる。

すなわち、今回実施した 2 つのアンケート調査は、いずれも岡山県（とりわけ岡山市）を地理的背景とする回答者を多数含むデータであること、しかしながら前者は高年層の男性を中心とする岡山県の本来により近い状況を反映している部分が多いと推測されるデータであるのに対し、後者は 20 歳前後の若年層女性による新しい傾向を多く含むと推測されるデータであると言える。

2.2. 設問

いずれの調査も設問は 2 つある。

一つは、語幹の直後に促音「っ」を伴う「言った」という語形における語幹「言」の発音である。西日本では促音ではなくウ音便の「言うた（ゆーた）」が広く分布しており、そのときの語幹は「ゆ」である。この「ゆーた」と、共通語の本来の語形と考えられる「いった」、およびその「い」を「ゆ」にした（あるいは共通語を取り入れる際に語幹を西日本風の「ゆ」に置き換えたとも考えられる）「ゆった」の 3 項対立で質問した。全体の語形は「言ったの？」とし、末尾が「の」か「ん」かについても併せて調査した。

もう一つの設問は、「言う」の打消しの形における語幹「言」の発音である。西日本では打消しは「ん」となるが、そのときの活用語尾「わ」の直前の語幹が「い」であるか「ゆ」であるか（すなわち「いわん」か「ゆわん」か）に注目した。あわせて、打消しの部分が共通語の「ない」やその融合形の「ねー」も現在では使われていることが想定されることから、それらを接続した語形の使用も問うた。

一般成人に対する調査で用いた質問文と選択肢は次のとおりである。女子大学生に対する調査も、質問文のリードについて、「言う」という言葉の発音についてを「言う」という動詞の活用形の発音について」とした以外は全く同じである。

問1 「言う」という言葉の発音についてお伺いします。

(1) 友達に「さっき何て言ったのか?」と尋ねるとします。

次の言い方のうち、自分で言うことがあるものすべてに○を付けてください。

- | | |
|------------------------|------------------------|
| 1. さっき何て <u>いった</u> ん? | 4. さっき何て <u>いった</u> の? |
| 2. さっき何て <u>ゆった</u> ん? | 5. さっき何て <u>ゆった</u> の? |
| 3. さっき何て <u>ゆう</u> たん? | 6. さっき何て <u>ゆう</u> たの? |

(2) 友達から「とても」を「もんげー」と言うかと聞かれたとします。あなたは「もんげー」を使わないので「もんげー」とは言わない」と答えるとします。

次の言い方のうち、自分で言うことがあるものすべてに○を付けてください。

- | | |
|--------------------------|--------------------------|
| 1. 「もんげー」とは <u>いわ</u> ん | 4. 「もんげー」とは <u>ゆわ</u> ない |
| 2. 「もんげー」とは <u>ゆわ</u> ん | 5. 「もんげー」とは <u>いわ</u> ねー |
| 3. 「もんげー」とは <u>いわ</u> ない | 6. 「もんげー」とは <u>ゆわ</u> ねー |

回答者に想定させた発話相手は「友達」とし、丁寧語を伴わない日常的な場面とした。なお、(2)の質問文にある「もんげー」は、「でーれー」「ほっけー」とともに岡山方言の一つとされる程度副詞であり、「ものすごい」を語源とする。あるテレビアニメのキャラクターが使用することで、全国的にある程度認知されつつある表現であるが、現在の岡山県における実際の使用者割合は少ないようである。すなわち、質問文の内容に合致する回答者は多いと推測されるが、回答者の実際の使用にかかわらず、「言わない」という想定で回答を求めた。

なお、自身の発音が「い」であるか「ゆ」であるかは、回答者によっては判断が迷うかもしれない。これがたとえば、連母音の融合形を使うか否かであれば（たとえば「無い」を「ねー」と言うか否か）、両者の発音が大きく異なることから、音声項目であっても意識化しやすく、したがって正確な回答が得られやすいと考えられる。これに対し「い」か「ゆ」かは、両者の発音が近いため、自身の発音といえども判定が難しいと感じる人が一定数いる可能性が考えられる。こうした微妙な違いを持つ音声項目は、本来であれば回答者に実際に発音してもらって調査するのが適当である。しかしながら今回は、アンケート調査の一項目として調査したという制約から、実際の発音と異なる回答も含まれている可能性は排除できない。すなわち、「ゆわん」とはゆ

わん」とか「いわん」とはいわん」のような、実際の発音と意識が食い違う回答である。とはいえ、全く意味のないデータとまでは言えないことから、今回は傾向の概略を把握したデータとしておおまかな傾向を見ていくこととする。

2.3. 結果と考察

(1) 「言ったの？」の語幹「言」の発音

「(さっき何で) 言ったの？」の結果は図1(一般成人)・図2(女子大学生)のとおりであった。グラフの数値は○を付けた人の割合である。

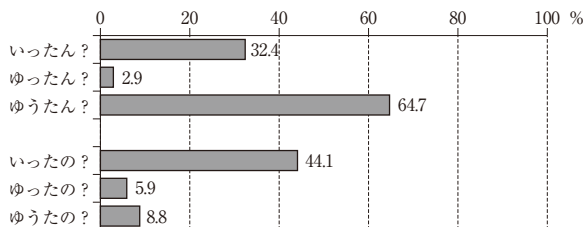


図1 「言ったの？」の語幹の発音 (一般成人)

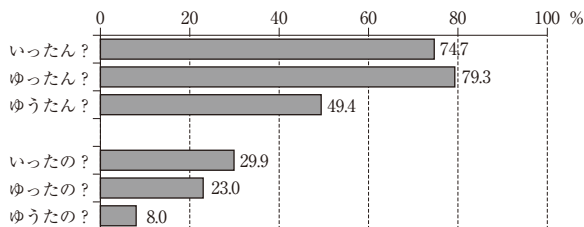


図2 「言ったの？」の語幹の発音 (女子大学生)

図1によると、最も優勢な表現は、ウ音便化しかつ「の」を「ん」にした「ゆうたん?」であることがわかる。これが当地の本来の語形と考えられる。これに次いで優勢な表現は、ウ音便ではなく共通語の促音便にした「いったの?」と、末尾のみ方言形「ん」にした「いったん?」である。注目されるのは、促音便でかつ語幹を「ゆ」とした「ゆったん?」や「ゆったの?」の使用者率が極めて少ない点である。つまり、ウ音便になる場合を除き、当地では語幹が「ゆ」となることは本来ほとんどなかったことがわかる。

これに対し、図2により女子大学生の結果を見ると、ウ音便化した「ゆうたん?」よりも、共通語的に促音便化した「いったん?」や「ゆったん?」の方がむしろ優勢であることがわかる。いずれも末尾は「ん」であることから、これらは方言と共通語のハイブリッドの表現と言える。

ここで特に注目されるのは、語幹を「ゆ」とした「ゆったん?」である。先に見た

一般成人では「ゆったん？」を使う人はほとんどいないのに対し、女子大学生では8割が使っている。ここにはおそらく、語幹を「い」から「ゆ」に置き換える言語変化が反映されている部分が少なくないと推測される。数値はこれよりも低くなるが、末尾を共通語の「の」とする「ゆったの？」も、女子大学生は2割が使っており、一般成人と比べると数値が増加する。共通語の表現においても、語幹を「い」から「ゆ」に置き換える言語変化が、岡山市に一定程度生じていることが推測される。

(2) 「言わない」の語幹「言」の発音

一方、「(「もんげー」とは) 言わない」の結果は図3(一般成人)・図4(女子大学生)のとおりであった。

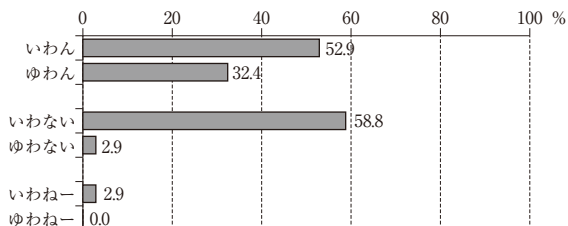


図3 「言わない」の語幹の発音（一般成人）

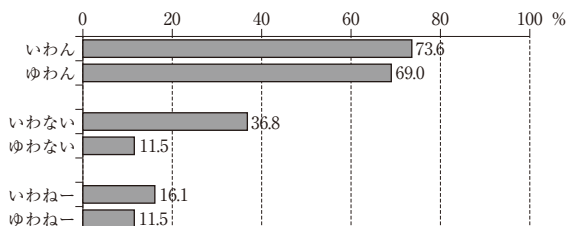


図4 「言わない」の語幹の発音（女子大学生）

図3によると、最も優勢な表現は共通語の「いわない」であり、次いで打消しの助動詞を「ん」にした「いわん」であることがわかる。現在では、友達のような近しい人と話す場面でも、共通語の「ない」を用いる人も少なくない点は注目される。

さらに注目されるのは、これらに次いで、語幹を「ゆ」とした「ゆわん」を使う人が3割いる点である。多数派ではないものの、先に見た「ゆったん？」や「ゆったの？」と異なり、一般成人において一定の勢力を持っている。ただし、打消しを「ない」にした「ゆわない」を使う人は非常に少ない。

これに対し、図4により女子大学生の結果を見てまず注目されるのは、打消しの助動詞として「ない」よりも「ん」の方が優勢である点である。「いったの？」の「の」を「ん」にした「いったん？」に比べ、「いわない」の「ない」を「ん」にした「いわん」

はより方言形と意識されやすいのではないかと推測されるが、地元の名士等の社会的地位が高い人が回答者として少なからず含まれている一般成人のデータでは、想定する相手が友達といえども方言形の使用は避けられた等の理由が可能性として考えられるが、一般に予想される傾向と逆になる明確な理由は現在のところ不明である。

ここで特に注目されるのは、語幹を「ゆ」とした「ゆわん」である。先に見た一般成人の約3割という使用者率から約7割へとほぼ倍増している。その結果、「ゆわん」の使用者率は「いわん」のそれとほぼ同水準に達する。「いわん」が優勢である一般成人と、「いわん」と「ゆわん」が拮抗する女子大学生の違いは、語幹を「い」から「ゆ」に置き換える言語変化が現在岡山市に生じており、それに起因する部分が少なくないと推測される。女子大学生では、数値は低いものの、一般成人と比べると「ゆわない」や「ゆわねー」の数値が増加するもの、同様の変化が反映されている可能性が考えられる。

以上、「言う」の語幹「言」を「ゆ」とする傾向は、「ゆったん？」についても「ゆわん」についても、上の世代よりも下の世代に多いこと、また数値は低くなるものの同様の傾向は共通語形にも見られることから、現在岡山市では、「言う」の複数の活用形において、語幹「言」を「い」から「ゆ」に置き換える変化が生じている可能性が考えられる。

3. テレビドラマのセリフの分析

公益財団法人放送番組センターが運営する施設に「放送ライブラリー」（横浜市）がある。ここには民放やNHKが過去に放送したテレビ番組・ラジオ番組のうち約18,000本が蓄積・整理され、無料公開されている。

この資料の中に、橋田壽賀子（1925年～）の脚本によるテレビドラマ「渡る世間は鬼ばかり」（TBSテレビ；現代ドラマ）がある。1990年10月に第1回が放送されたのち、約20年後の2011年9月までシリーズとして断続的に放送され、その後も毎年のように「スペシャル」が放送されている。

このドラマは、登場人物が多くまたセリフも多いことから、事前にセリフが作られているという当然のことに留意すれば、現代の話し言葉を研究するための資料として有効であると考えられる。特に本稿で注目する動詞「言う」の語幹「言」を「い」と発音するか「ゆ」と発音するかまでは、「演出家や俳優による台詞の変更を許さないことで有名である」（ウィキペディアの「橋田壽賀子」）とされる橋田壽賀子のドラマでも、橋田壽賀子やプロデューサーの石井ふく子等による統制はおそらくなく、俳優の自然な発音にゆだねられているものと推測される。

放送ライブラリーには、このうち表1に示した8番組が保存され閲覧可能である。ドラマ番組など連続番組の多くは、たとえば初回と最終回など、視聴者に特に注目された回のみが保存されているが、本番組も同様である。通し番号「1」は第1シリーズの初回であるが、続編を予定していなかったためかあえて「第1シリーズ」という表示はない。保存されているもので最も新しい番組は、2009年3月放送の第9シリーズ最終回である。初回から約20年の間隔がある。表1のうち、網掛けをして示し

た通し番号「6」と「8」は、同じシリーズの別の回であることと調査時間の制約から調査対象から除外し、それ以外の6番組を調査対象とした。コマーシャルを除く番組時間は合計482分（約8時間）である。

表1 「渡る世間は鬼ばかり」の分析対象一覧

通し番号	番組	放送日	時間
1	渡る世間は鬼ばかり〔第1回〕	1990年10月11日	47分
2	渡る世間は鬼ばかり（第2シリーズ）〔第1回〕	1993年4月15日	47分
3	渡る世間は鬼ばかり（第3シリーズ）〔第1回〕	1996年4月4日	96分
4	渡る世間は鬼ばかり（第5シリーズ）〔第50回・最終回〕	2001年9月27日	97分
5	渡る世間は鬼ばかり（第8シリーズ）〔第1回〕	2006年4月6日	101分
6	渡る世間は鬼ばかり（第8シリーズ）〔第50回・最終回〕	2007年3月29日	96分
7	渡る世間は鬼ばかり（第9シリーズ）〔第1回〕	2008年4月3日	94分
8	渡る世間は鬼ばかり（第9シリーズ）〔第49回・最終回〕	2009年3月6日	97分

この6番組の中で、「そうゆうことじゃない」のような、もはやく発話する>という意味を持たない形式化した「言う」も含め、「言う」が出現した場合に、その前後の文脈を含めてできるだけ発音したとおり忠実に文字化した。あわせて、発話者（登場人物およびその演者〔出演者〕）の氏名やその属性（性別や年齢層、出演者の生年等）を、全ての文字化データに付加してデータベース化した。「言う」が出現した場合にのみデータ化したため、出演はしているけれどもデータはないという人物もいる。しかしながら「言う」は出現頻度が高いことから、多くの出演者からは多少なりともデータが得られた。

データが得られた出演者を、生まれた年代別・性別に一覧表として示すと表2のとおりである。（ ）内は登場人物名である。出演者名の末尾に示した2桁の小さな数字は生年の下二桁である。このうち【 】でくくって示した1920年代生まれ女性の杉山とく子（野田ハナ役）と京唄子（本間常子役）はともに関西出身という設定であり、言葉遣いも「病気直そうゆう、気いにもなれへんかったわ」（野田ハナ）とか「あーこりゃやっぱりこうゆうとこになあ、（孫の）ひなを置いといたんがいかなかったですわなあ」（本間常子）のように終始関西弁を使っていた。本稿で分析対象とする現象は、「言う」のウ音便化とも関係する可能性があることから、この二人の発話は分析対象から除外することとした。それ以外の人物は全員、ドラマにおいては共通語を用いていた。この二人を除く実際の分析対象者数は計48人である。

「言う」の語幹を「い」と発音するか「ゆ」と発音するかは、直後の活用語尾の音がどうであるかがおおいに関係しているらしいことが分析の過程で見えてきたことから、以下ではその分類により分析してゆく。なお、「精密検査つつたつてねえ」や「何が忙しいうちうんだよー」のように、「っていう／ってゆう」が「つつ」「ちゅう」となった表現や、「目立ちたいって気持ちも」のように「いう／ゆう」が想定されるもののその語形がすり減って完全に消滅した表現は「い」か「ゆ」かが特定できないことから分析対象から除外した。また、「なんにもしてやれない*うのさびしいもんだわよ」のように肝心の箇所が聞き取れないケースも同様に分析対象から除

表2 「渡る世間は鬼ばかり」の出演者一覧

生まれ	性別	出演者氏名（登場人物名）	人数	合計人数
1920 年代	女性	森光子 ²⁰ （森山珠子）／赤木春恵 ²⁴ （小島キミ）／山岡久乃 ²⁶ （岡倉節子）／野村昭子 ²⁷ （青山タキ） 【杉山とく子 ²⁶ （野田ハナ）／京唄子 ²⁷ （本間常子）】	4	4
	男性	—	0	
1930 年代	女性	河内桃子 ³⁰ （高橋年子）／渡辺美佐子 ³² （菊村サワ）／草笛光子 ³³ （山口政子）	3	6
	男性	藤岡琢也 ³⁰ （岡倉大吉）／宇津井健 ³¹ （岡倉大吉）／山口崇 ³⁶ （医師の澤村） ※宇津井健は藤岡琢也の後任	3	
1940 年代	女性	長山藍子 ⁴¹ （野田弥生）／泉ピン子 ⁴⁷ （小島五月）／沢田雅美 ⁴⁹ （山下久子）	3	8
	男性	石坂浩二 ⁴¹ （「ナレーター」）／前田吟 ⁴¹ （野田良）／角野卓造 ⁴⁸ （小島勇） ／岡本信人 ⁴⁸ （田島周平）／佐藤B作 ⁴⁹ （金田典介）	5	
1950 年代	女性	夏樹陽子 ⁵² （大井直子）／中田喜子 ⁵³ （高橋文子）／東てる美 ⁵⁶ （小島邦子）	3	6
	男性	大和田獏 ⁵⁰ （野々下長太）／三田村邦彦 ⁵³ （高橋亨）／武岡淳一 ⁵⁵ （大井道隆）	3	
1960 年代	女性	熊谷真美 ⁶⁰ （菊村みのり）／野村真美 ⁶⁴ （岡倉葉子）／山下容莉枝 ⁶⁴ （金田利子） ／藤田朋子 ⁶⁵ （岡倉長子）／中島唱子 ⁶⁶ （聖子）	5	8
	男性	榎本たつお ⁶³ （松本達夫）／錦織一清 ⁶⁵ （菊村康史）／植草克秀 ⁶⁶ （本間英作）	3	
1970 年代	女性	山辺有紀 ⁷⁴ （野田あかり）／水町レイコ ⁷⁴ （北川智子）／西部里菜 ⁷⁶ （山形明子） ／吉村涼 ⁷⁸ （小島愛）／[不明] ^{7*} （[不明]）	5	7
	男性	岩渕健 ⁷⁶ （野田武志）／徳重聡 ⁷⁸ （大原透）	2	
1980 年代	女性	山辺江梨 ⁸⁵ （遠山遊）／清水由紀 ⁸⁶ （大井貴子）／宇野なおみ ⁸⁹ （野々下加津） ／米沢由香 ^{8*} （山下加奈）	4	7
	男性	えなりかずき ⁸⁴ （小島真）／富田真之介 ⁸⁵ （高橋望）／長谷川純 ⁸⁵ （森山壮太）	3	
1990 年代	女性	大谷玲風 ⁹⁶ （本間日向子）	1	1
	男性	—	0	
2000 年代	女性	—	0	1
	男性	渡邊奏人 ⁰⁰ （野田勇気）	1	

外した。そうした処理の結果、実際に分析対象となったデータは618件であった。単純に計算すると、ドラマの1.3分に1件のデータが得られたことになる。データ収集という点からは非常に効率の良い言語事象である。

3.1.「言う」の活用語尾が「う」の場合

「言う」の活用語尾が「う」であるとき、すなわち＜発話する＞という意味を持つ「この人のゆうとおりでですよ」のような連体形、「じゃああたしがゆう」「またそうゆうことゆう」のような終止形、そして「宗方さんてゆう、立派な人たちに」「またそうゆうことゆう」のようなもはや＜発話する＞という意味を持たない形式化した「言う」の連体形などである。全体的に終止形は少なく、ほとんどは連体形であった。

結果は表3のとおりであった。「ゆ」が287件に対し「い」は皆無であった。すなわち、活用語尾が「う」である場合は、語幹は全てのケースで「ゆ」であり、「言う」

は現在「ゆう」で完全に安定している。『日本国語大辞典 第二版』（小学館）の「言う」の項の「語誌」には、「現代仮名づかいで「いう」と表記するが、発音はユウである」とあるが、まさにそのとおりであることが本データからも確認された。

表3 活用語尾が「う」であるときの語幹「言」の発音 [287 件]

	全体	女性	男性	1920年代 生まれ	1930年代 生まれ	1940年代 生まれ	1950年代 生まれ	1960年代 生まれ	1970年代 生まれ	1980年代 生まれ	1990年代 生まれ	2000年代 生まれ
い	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
ゆ	287	181	106	39	43	96	31	35	24	18	1	0

表 3-1 活用語尾が「う」であるときの語幹「言」の発音（実質動詞の場合） [136 件]

	全体	女性	男性	1920年代 生まれ	1930年代 生まれ	1940年代 生まれ	1950年代 生まれ	1960年代 生まれ	1970年代 生まれ	1980年代 生まれ	1990年代 生まれ	2000年代 生まれ
い	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
ゆ	136	91	45	18	17	58	14	14	9	5	1	0

表 3-2 活用語尾が「う」であるときの語幹「言」の発音（形式動詞の場合） [151 件]

	全体	女性	男性	1920年代 生まれ	1930年代 生まれ	1940年代 生まれ	1950年代 生まれ	1960年代 生まれ	1970年代 生まれ	1980年代 生まれ	1990年代 生まれ	2000年代 生まれ
い	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
ゆ	151	90	61	21	26	38	17	21	15	13	0	0

表 3-1 と表 3-2 は、＜発話する＞という意味を持つ実質動詞（136 件）と、もはやそうした意味を持たず形式化した形式動詞（151 件）に分けて集計したものである。これらをまとめたものが全て「ゆ」であることから意味のない集計であるかもしれないが、それぞれの件数を示すことで安定した傾向であるか否かを見ることとする。

これらによると、実質動詞についても形式動詞についても、「ゆ」で発音されることは男女の別なく安定した傾向であること、また生まれた年代別に見ると少なくとも 1920 年代から 1970 年代生まれの間では安定した傾向であることがわかる。

3.2. 「言う」の活用語尾が「い」の場合

「言う」の活用語尾が「い」であるとき、すなわち＜発話する＞という意味を持つ「こんなこといいたくないわよー」や、「夕方には（精密検査から）帰れるっていいますからねえ」のようなく＜発話する＞という意味が希薄化し形式化しつつある「言う」である。この他、「言い出す」「言い張る」「言い聞かせる」のような「言う」を前部要素に持つ複合動詞や、「言い訳」「言いなり」のような「言う」を前部要素に持つ複合名詞、「言にくい」のような「言う」を前部要素に持つ複合形容詞も分析対象とした。

結果は表 4 のとおりであった。「い」が 25 件に対し「ゆ」は皆無であった。すなわち、活用語尾が「い」である場合、語幹はすべてのケースで「い」であり、「言う」は現在「い

い」で完全に安定している。先に見た活用語尾が「う」である場合と全く逆の形で安定していると言える。「言う」は「ゆう」、「言い」は「いい」と、語幹の発音が相補分布をなしている。

表 4 活用語尾が「い」であるときの語幹「言」の発音 [25 件]

	全体	女性	男性	1920年代 生まれ	1930年代 生まれ	1940年代 生まれ	1950年代 生まれ	1960年代 生まれ	1970年代 生まれ	1980年代 生まれ	1990年代 生まれ	2000年代 生まれ
い	25	18	7	5	4	7	2	6	0	1	0	0
ゆ	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0

3.3.「言う」の活用語尾が「っ」の場合

「言う」の活用語尾が「っ」であるとき、すなわち「だれも（実家に）出さないなんていってやしないのにねえ」や「遺産がほいってゆったらさあ」のようなケースである。促音の直後は「て」（すなわち「言って」）か「た」（すなわち「言った」）である。「はっきりゆっとくけどもさあ」のような促音の直後が「と」の場合もあるが、これは「ておく」が「とく」と縮約されたものと見て「て」のバリエーションとした。

結果は表5のとおりであった。「い」が160件あるのに対し「ゆ」も39件あった。「い」も「ゆ」も両方あるが、「ゆ」は構成比にすると約20%にとどまり、どちらかと言うと従来の「い」の方が優勢である。

男女別に見ると「ゆ」は男性よりも女性で優勢である。また、生まれ年別に見ると、1930年代生まれまでは「い」が圧倒的に優勢であるのに対し、1940年代生まれ以降では「ゆ」も一定程度出現する傾向が認められる。性別ではおもに女性から、生まれ年では主として1940年代生まれから、「ゆって」「ゆった」のような「ゆ」が使われ始めた可能性が考えられる。

表 5 活用語尾が「っ」であるときの語幹「言」の発音 [199 件]

	全体	女性	男性	1920年代 生まれ	1930年代 生まれ	1940年代 生まれ	1950年代 生まれ	1960年代 生まれ	1970年代 生まれ	1980年代 生まれ	1990年代 生まれ	2000年代 生まれ
い	160	100	60	29	24	41	20	26	8	12	0	0
ゆ	39 (19.6%)	32 (24.2%)	7 (10.4%)	3	1	16	3	9	2	2	1	2

表 5-1 活用語尾が「って」であるときの語幹「言」の発音 [154 件]

	全体	女性	男性	1920年代 生まれ	1930年代 生まれ	1940年代 生まれ	1950年代 生まれ	1960年代 生まれ	1970年代 生まれ	1980年代 生まれ	1990年代 生まれ	2000年代 生まれ
い	127	78	49	20	20	35	16	19	6	11	0	0
ゆ	27 (17.5%)	22 (22.0%)	5 (9.3%)	2	0	11	2	6	1	2	1	2

表 5-2 活用語尾が「った」であるときの語幹「言」の発音 [45 件]

	全体	女性	男性	1920年代 生まれ	1930年代 生まれ	1940年代 生まれ	1950年代 生まれ	1960年代 生まれ	1970年代 生まれ	1980年代 生まれ	1990年代 生まれ	2000年代 生まれ
い	33	22	11	9	4	6	4	7	2	1	0	0
ゆ	12 (26.7%)	10 (31.3%)	2 (15.4%)	1	1	5	1	3	1	0	0	0

表 5-1 と表 5-2 は、「って」と「った」に分けて集計したものである。「った」はデータ数が 45 件と少なくなるため安定した傾向が見出しにくくなるが、「って」は先に見た全体とほぼ同様の傾向が見られる。

ただし、こうした傾向は、特定の人物において多数のデータが出現したためとも考えられる。そこで、これを「使用者数」という観点から分析したのが表 6 である。「い」の数値(人数)は、1 回でも「いって」ないしは「いった」と発音した人の数である。「ゆ」の数値もこれと同様である。同一人物が「い」も「ゆ」も使った場合はそれぞれでカウントされているため、単純に合計した人数は、全体の 36 人を超える。人数が一定以上確保できている「全体」と男女別の集計では、() 内に割合も示した。

これによると、「い」で発音した人は全体で 9 割近くいることがわかる。すなわち「ゆ」の使用は、「い」からの置き換えというよりも、多くは「い」と併用する形で行なっていることがわかる。一方、「ゆ」の使用者はおよそ 4～5 割であり、半数近くの人がか用いていることがわかる。男女別に見ると「ゆ」の使用者率は男性よりも女性で高く、使用者という観点から見ても「ゆ」はどちらかというと女性において優勢である。さらに、生まれ年では、1940 年代生まれ以降から「ゆ」が多くなるように見える。

表 6 活用語尾が「っ」であるときの語幹「言」の発音 [36 人]

	全体 (36 人)	女性 (21 人)	男性 (15 人)	1920年代 生まれ (3人)	1930年代 生まれ (4人)	1940年代 生まれ (7人)	1950年代 生まれ (6人)	1960年代 生まれ (6人)	1970年代 生まれ (3人)	1980年代 生まれ (5人)	1990年代 生まれ (1人)	2000年代 生まれ (1人)
い	32 (88.9%)	19 (90.5%)	13 (86.7%)	3	4	6	6	5	3	5	0	0
ゆ	16 (44.4%)	10 (47.6%)	6 (40.0%)	1	1	5	1	2	2	2	1	1

表 6-1 活用語尾が「って」であるときの語幹「言」の発音 [35 人]

	全体 (35 人)	女性 (20 人)	男性 (15 人)	1920年代 生まれ (3人)	1930年代 生まれ (4人)	1940年代 生まれ (7人)	1950年代 生まれ (6人)	1960年代 生まれ (6人)	1970年代 生まれ (3人)	1980年代 生まれ (4人)	1990年代 生まれ (1人)	2000年代 生まれ (1人)
い	28 (80.0%)	15 (75.0%)	13 (86.7%)	3	4	5	5	5	3	3	0	0
ゆ	13 (37.1%)	9 (45.0%)	4 (26.7%)	1	0	4	1	2	1	2	1	1

表 6-2 活用語尾が「った」であるときの語幹「言」の発音 [17 人]

	全体 (17 人)	女性 (10 人)	男性 (7 人)	1920年代 生まれ (2人)	1930年代 生まれ (2人)	1940年代 生まれ (5人)	1950年代 生まれ (3人)	1960年代 生まれ (3人)	1970年代 生まれ (1人)	1980年代 生まれ (1人)	1990年代 生まれ (0人)	2000年代 生まれ (0人)
い	16 (94.1%)	9 (90.0%)	7 (100.0%)	2	2	5	2	3	1	1	0	0
ゆ	7 (41.2%)	5 (50.0%)	2 (28.6%)	1	1	2	1	1	1	0	0	0

表 6-1 は「って」、表 6-2 は「った」に分けて示したものである。該当者が 35 人いる「っ」について「ゆ」に注目すると、全体では約 4 割が使用していること、男女別では男性よりも女性にやや多いこと、1940 年代生まれ以降から多くなるように見えることなど、先に見た全体と同様の傾向が認められる。

3.4. 「言う」の活用語尾が「わ」の場合

「言う」の活用語尾が「わ」であるとき、すなわち「いやみをたらたらいわれて（店を）出てきたんだろ?」「母ちゃん（＝私）なんにもゆわないよ」や「はっきりゆわせてもらうわよ」のようなケースである。「わ」の直後は、「れ」（すなわち「言われ」）か「な」（すなわち「言わな」）か「せ」（すなわち「言わせ」）である。

結果は表 7 のとおりであった。「い」が 35 件に対し「ゆ」は 50 件であった。「い」も「ゆ」も両方あるが、「ゆ」は構成比にすると約 59% である。先に見た「っ」の場合と異なり、活用語尾が「わ」の場合は、どちらかと言えば「ゆ」の方が優勢である。

男女別に見ると、「っ」の場合と異なり、「ゆ」は女性よりも男性で多少優勢のように見える。生まれ年別に見ると、1920 年代生まれからすでに「い」と「ゆ」の両方が同程度に現われるが、1940～50 年代生まれ以降になると「ゆ」が優勢になる。活用語尾が「っ」の場合よりも先行して、語幹「ゆ」が使われ始めた可能性が考えられる。

表 7 活用語尾が「わ」であるときの語幹「言」の発音 [85 件]

	全体	女性	男性	1920年代 生まれ	1930年代 生まれ	1940年代 生まれ	1950年代 生まれ	1960年代 生まれ	1970年代 生まれ	1980年代 生まれ	1990年代 生まれ	2000年代 生まれ
い	35	27	8	6	5	10	5	5	2	2	0	0
ゆ	50 (58.8%)	34 (55.7%)	16 (66.7%)	4	5	12	8	10	4	7	0	0

表 7-1 活用語尾が「われ」であるときの語幹「言」の発音 [53 件]

	全体	女性	男性	1920年代 生まれ	1930年代 生まれ	1940年代 生まれ	1950年代 生まれ	1960年代 生まれ	1970年代 生まれ	1980年代 生まれ	1990年代 生まれ	2000年代 生まれ
い	21	13	8	2	5	6	2	4	1	1	0	0
ゆ	32 (60.4%)	19 (59.4%)	13 (61.9%)	2	3	5	7	7	3	5	0	0

表 7-2 活用語尾が「わな」であるときの語幹「言」の発音 [30 件]

	全体	女性	男性	1920年代 生まれ	1930年代 生まれ	1940年代 生まれ	1950年代 生まれ	1960年代 生まれ	1970年代 生まれ	1980年代 生まれ	1990年代 生まれ	2000年代 生まれ
い	14	14	0	4	0	4	3	1	1	1	0	0
ゆ	16 (53.3%)	13 (48.1%)	3 (100.0%)	1	2	6	1	3	1	2	0	0

表 7-3 活用語尾が「わせ」であるときの語幹「言」の発音 [2 件]

	全体	女性	男性	1920年代 生まれ	1930年代 生まれ	1940年代 生まれ	1950年代 生まれ	1960年代 生まれ	1970年代 生まれ	1980年代 生まれ	1990年代 生まれ	2000年代 生まれ
い	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
ゆ	2 (100.0%)	2 (100.0%)	0 (-)	1	0	1	0	0	0	0	0	0

表 7-1 ～表 7-3 は、「われ」と「わな」と「わせ」に分けて集計したものである。このうち「わせ」はデータ数がわずか 2 件であるため傾向が見出しにくい、「われ」については 1960 年代生まれ以降で、「わな」についても 1940 年代生まれ前後から「ゆ」が優勢になるように見える。

以上について「使用者数」という観点から分析したのが表 8 である。「っ」の場合と同様、「い」の数値（人数）は、1 回でも「いわれ」ないしは「いわな」ないしは「いわせ」と発音した人の数である。「ゆ」の数値もこれと同様である。

これによると、「い」で発音した人は全体で 7 割近くいることがわかる。一方、「ゆ」の使用者は非常に多く 9 割近くいる。「い」の発音が少数派になったわけではないが、先に見た「っ」の場合と異なり、使用者の観点から見た場合も、活用語尾が「わ」の場合は、現在では「ゆ」の方がむしろ優勢である。なお、「使用者数」の観点から見ると、男女差はほとんどない。生まれ年では、1950 年代生まれ以降から「い」よりも「ゆ」が優勢になるように見える。

表 8-1 ～表 8-3 は、「われ」「わな」「わせ」に分けて示したものである。該当者が比較的多い「われ」について「ゆ」に注目すると、全体では約 8 割が使用していること、1950 年代生まれ以降から多くなるように見えることなど、先に見た全体と同様の傾向が認められる。

表 8 活用語尾が「わ」であるときの語幹「言」の発音 [27 人]

	全体 (27 人)	女性 (17 人)	男性 (10 人)	1920年代 生まれ (3人)	1930年代 生まれ (3人)	1940年代 生まれ (5人)	1950年代 生まれ (4人)	1960年代 生まれ (5人)	1970年代 生まれ (3人)	1980年代 生まれ (4人)	1990年代 生まれ (0人)	2000年代 生まれ (0人)
い	18 (66.7%)	13 (76.5%)	5 (50.0%)	2	3	4	2	3	2	2	0	0
ゆ	24 (88.9%)	15 (88.2%)	9 (90.0%)	2	3	4	4	5	2	4	0	0

表 8-1 活用語尾が「われ」であるときの語幹「言」の発音 [24 人]

	全体 (24 人)	女性 (14 人)	男性 (10 人)	1920年代 生まれ (2人)	1930年代 生まれ (3人)	1940年代 生まれ (5人)	1950年代 生まれ (4人)	1960年代 生まれ (4人)	1970年代 生まれ (3人)	1980年代 生まれ (3人)	1990年代 生まれ (0人)	2000年代 生まれ (0人)
い	14 (58.3%)	9 (64.3%)	5 (50.5%)	1	3	4	1	3	1	1	0	0
ゆ	20 (83.3%)	11 (78.6%)	9 (90.0%)	2	2	4	4	3	2	3	0	0

表 8-2 活用語尾が「わな」であるときの語幹「言」の発音 [18 人]

	全体 (18 人)	女性 (15 人)	男性 (3 人)	1920年代 生まれ (2人)	1930年代 生まれ (2人)	1940年代 生まれ (3人)	1950年代 生まれ (3人)	1960年代 生まれ (4人)	1970年代 生まれ (2人)	1980年代 生まれ (2人)	1990年代 生まれ (0人)	2000年代 生まれ (0人)
い	9 (50.0%)	9 (60.0%)	0 (0.0%)	2	0	2	2	1	1	1	0	0
ゆ	13 (72.2%)	10 (66.7%)	3 (100.0%)	1	2	3	1	3	1	2	0	0

表 8-3 活用語尾が「わせ」であるときの語幹「言」の発音 [2 人]

	全体 (2 人)	女性 (2 人)	男性 (0 人)	1920年代 生まれ (1人)	1930年代 生まれ (0人)	1940年代 生まれ (1人)	1950年代 生まれ (0人)	1960年代 生まれ (0人)	1970年代 生まれ (0人)	1980年代 生まれ (0人)	1990年代 生まれ (0人)	2000年代 生まれ (0人)
い	0 (0.0%)	0 (0.0%)	0 (-)	0	0	0	0	0	0	0	0	0
ゆ	2 (100.0)	2 (100.0)	0 (-)	1	0	1	0	0	0	0	0	0

3.5.「言う」の活用語尾が「え」の場合（可能動詞「言える」の場合）

活用語尾が「え」となる表現もありうる。たとえば「早く言えよ」とか「はっきり言えば」などである。本データにはこのうち「言えば」が1件あった。1940年代生まれの女性（泉ピン子）が「「はい」っていえばいいの！」と「い」で発音していた。

「言」の直後が「え」となる場合には、「言う」を可能動詞にした「言える」もある。「言」の直後に語幹の一部として「え」が現われる。じつはこれが一定数見られた。厳密に言えば動詞は異なるが、「言う」と密接に関係することからこれも分析対象とした。具体的な表現としては、「よくそれだけペラペラいえるねえ、ほんとに」や、動詞「言える」が多少形式化した「少しはあんたのこと考えてくれなかったら夫婦だなんていえやしないじゃないの」などである。

結果は表9のとおりであった。「い」が20件に対し「ゆ」は1件であり、ほとんどは「い」であった。「言える」の場合は「い」が非常に優勢である。

唯一「ゆ」で発音していたのは、1970年代生まれの女性（山辺有紀；放送当時21歳前後）であった。「あたしもそんなふうにゆえるようん（＝に）になりたいなあ」という発話に現われた。「い」から「ゆ」への変化の先がけと考えられそうである。

表 9 活用語尾が「え」であるとき(可能動詞「言える」の場合)の語幹「言」の発音 [21 件]

	全体	女性	男性	1920年代 生まれ	1930年代 生まれ	1940年代 生まれ	1950年代 生まれ	1960年代 生まれ	1970年代 生まれ	1980年代 生まれ	1990年代 生まれ	2000年代 生まれ
い	20	11	9	4	4	8	0	2	1	1	0	0
ゆ	¹ (4.8%)	¹ (8.3%)	⁰ (0.0%)	0	0	0	0	0	1	0	0	0

これを「使用者数」という観点から分析したのが表 10 である。注目される「ゆ」は、14 人のうちの 1 人、女性 7 人のうち 1 人に見られた。

表 10 活用語尾が「え」であるとき(可能動詞「言える」の場合)の語幹「言」の発音 [14 人]

	全体 (14 人)	女性 (7 人)	男性 (7 人)	1920 年代 生まれ (2 人)	1930 年代 生まれ (3 人)	1940 年代 生まれ (4 人)	1950 年代 生まれ (0 人)	1960 年代 生まれ (2 人)	1970 年代 生まれ (2 人)	1980 年代 生まれ (1 人)	1990 年代 生まれ (0 人)	2000 年代 生まれ (0 人)
い	13 (92.9%)	6 (85.7%)	7 (100.0%)	2	3	4	0	2	1	1	0	0
ゆ	¹ (7.1%)	¹ (14.3%)	⁰ (0.0%)	0	0	0	0	0	1	0	0	0

3.6. 「言う」の語幹「言」の個人内変化

「言う」の活用語尾が「っ」となる場合や「わ」となる場合、すなわち「言っ」や「言わ」となる場合は、語幹「言」は「い」と「ゆ」の両方がそれぞれ一定数見られた。生まれ年が現在に近いほど「ゆ」が優勢になる傾向が見られることから、これは現在まさに「い」から「ゆ」に変化しつつある状況が反映されたものと考えられる。

このように言語変化が現在進行中である場合、個人の中にも同じ方向への言語変化が見られる可能性が考えられる。特に語彙レベルや文法レベルにおいてはおおいにありうる。かつては「バンド」と言っていた個人が「ベルト」と言い始めるとか、可能の意味の「見られる」を「見える」と言い始めるなどである。これに対し発音（厳密に言えば発音が関与する語形）は、相対的に意識化されにくいいため個人内での変化は少ないかもしれないが、はたしてどうであるかを分析する。

(1) 「言う」の活用語尾が「っ」の場合

放送当時の年齢を 10 歳刻みで分類し、複数の年齢層でデータが得られた出演者を分析対象とした。ただし、いずれかの年齢層でデータが 1 件しかない場合は分析対象から除外し、どの年齢層においても 2 回以上の発話が見られた出演者に限定した。

結果は表 11 のとおりであった。分析対象は 9 人である。

表 11 「言った／言って」における語幹「言」の発音の個人内変化

		10代	20代	30代	40代	50代	60代	70代
赤木春恵（1924年生まれ・女性） 〔小島キミ役〕	い						5	10
	ゆ						0	3
藤岡琢也（1930年生まれ・男性） 〔岡倉大吉役〕	い						9	5
	ゆ						0	0
長山藍子（1941年生まれ・女性） 〔野田弥生役〕	い				2	3	7	
	ゆ				0	0	1	
泉ピン子（1947年生まれ・女性） 〔小島五月役〕	い				3	5	1	
	ゆ				3	6	3	
角野卓造（1948年生まれ・男性） 〔小島勇役〕	い				1	6		
	ゆ				1	0		
中田喜子（1953年生まれ・女性） 〔高橋文子役〕	い			3	5	2		
	ゆ			0	0	0		
藤田朋子（1965年生まれ・女性） 〔遠山／本間長子役〕	い		2	7	5			
	ゆ		2	4	2			
吉村涼（1978年生まれ・女性） 〔小島／田口愛役〕	い	2	2					
	ゆ	0	1					
えなりかずき（1984年生まれ・男性） 〔小島眞役〕	い	3	2					
	ゆ	1	0					

*全ての年代で「言った／言って」の出現回数が2回以上であることを条件とする。

赤木春恵（1924年生まれ・女性）は、60代で「い」5件、「ゆ」0件であったものが、70代では「い」10件、「ゆ」3件となり、この間に「ゆ」を使い始めるようになった可能性が考えられる。しかし全体としては、個人の中での顕著な変化はどの出演者にも認めにくい。藤岡琢也（1930年生まれ・男性）や長山藍子（1941年生まれ・女性）、中田喜子（1953年生まれ・女性）は「い」でかなり一定しているが、泉ピン子（1947年生まれ・女性）や藤田朋子（1965年生まれ・女性）は「い」と「ゆ」で揺れている。こうした違いは、出演者の個性や、役者としての発音への意識の違いなどが関係しているのかもしれない。なお、「ゆ」で一定している出演者はいなかった。

(2) 「言う」の活用語尾が「わ」の場合

同様に活用語尾が「わ」である場合を分析したのが表 12 である。分析対象は5人である。

データ数が少ないため確定的なことは言いにくいだが、長山藍子と藤田朋子が、年齢層が上がると「い」から「ゆ」に完全に置き換わっている点が注目される。これに関連し、泉ピン子も、50代では「い」4件、「ゆ」4件であったものが、60代になると「い」0件、「ゆ」3件と「ゆ」に傾く点も注目される。明確なことは言いにくい、「い」から「ゆ」への個人内での変化が見られる者もいる可能性がある。

表 12 「言わ」における語幹「言」の発音の個人内変化

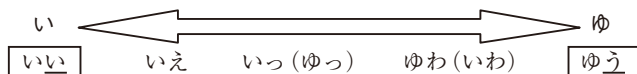
		10代	20代	30代	40代	50代	60代	70代
藤岡琢也 (1930年生まれ・男性) [岡倉大吉役]	い						1	2
	ゆ						2	1
長山藍子 (1941年生まれ・女性) [野田弥生役]	い					3	0	
	ゆ					0	2	
泉ピン子 (1947年生まれ・女性) [小島五月役]	い					4	0	
	ゆ					4	3	
中田喜子 (1953年生まれ・女性) [高橋文子役]	い			2	1			
	ゆ			1	1			
藤田朋子 (1965年生まれ・女性) [本間長子役]	い			3	0			
	ゆ			0	3			

*全ての年代で「言わ」の出現回数が2回以上であることを条件とする。

4. 調査結果のまとめと考察

岡山市で最近実施した2つの年齢グループに対するアンケート調査の分析結果から、またデータ数が一定程度ある出演者としては生まれ年に約60年の幅を持つ約20年間放送されたテレビドラマのセリフの分析結果から、「言う」の語幹「言」は、本来の「い」から「ゆ」へと現在変化しつつあること、そしてそれは「言わん」「言ったん」のような方言形の語幹にも及んでいることが推測される。

テレビドラマのセリフの分析によると、「い」から「ゆ」への変化の度合いには、語幹直後の活用語尾が関係しており、次のような序列が観察された。



図の両端のうち「いい」は「い」で、「ゆう」は「ゆ」で完全に安定している。逆に言えば、「ゆいます」(言います)や「ほんとうのことをいうと」(本当のことを言う)のような発音はないということである。このうち「いい」に非常に近い状況にあるのが「いえ」である。ただし「ゆえる」のような「ゆえ」も萌芽的に観察される。

これに対し活用語尾が「っ」の場合と「わ」の場合は、現在ゆれている。活用語尾が「っ」の場合はどちらかというに従来の「い」が優勢であるのに対し、活用語尾が「わ」の場合はむしろ「ゆ」の方が優勢である。

こうした傾向の違いは、言語変化の進捗の違いを表わしていると考えられるならば、次のような順序で「ゆ」への変化が進行したことになる。2行目に本来の「い」の発音を、3行目に新しい「ゆ」の発音を示す。(母音のウは平唇であるが、ここでは簡略に[u]で示す)

言う	→	言わ	→	言っ	→	言え	→	言い
[iu]		[iwa]		[it]		[ie]		[ii]
[ju:]		[juwa]		[jut]		[jue]		[jui]

「ゆ」は母音が[u]であるが、語幹の「い」をウ段の「ゆ」にするためには、直後に[u]ないしはそれに近い音が存在し、それによる逆行同化が必要となる。そうした“力”を受けつつ、拍数は保持すべく語幹の[i]を半母音[j]にすれば[ju]が得られる。そのため、語幹「言」の直後に[u]を持つ「言う」がまず「ゆ」となったのであろう。この[u]に近い発音が半母音[w]であることから、続いて「言わ」が「ゆ」に変化したものと考えられる。調音音声学上[u]から最も離れている母音は[i]である。そのため「言い」は全く「ゆ」にならず「い」で安定しているものと考えられる。「言え」も「い」でかなり安定しているのは、[e]の調音位置が[i]に近いためであろう。「言っ」には逆行同化を生じさせる要因は特にないが、一方で「言い」や「言え」に見られるような「ゆ」への変化を阻止する要因もないこと、また語幹を「ゆ」とするケースが徐々に増加することへの類推もおそらく働いたために、いまだ少数派ではあるものの、「ゆ」への変化が見られるものと考えられる。

今回のデータにはたまたま見られなかったが、活用語尾にはこの他、「だれが何と言おうとも」のような「お」もある。母音は[o]であるが、調音位置が[u]に近いことから、もしデータとして存在した場合は、おそらく「言わ」と「言っ」の中間付近に位置づけられるものと考えられる。

5. 関連する研究による知見との関係および今後の課題

動詞「言う」の語幹「言」を「ゆ」と発音する現象については、早くはやマサキセイコー (1984) の指摘がある。おそらく日常的な観察をもとづくものと推測されるが、「言って」を「ユッテ」と発音する人がふえている、というよりは、正しく「イッテ」と発音する人にはメックにあわないのが今のアリサマだ」と指摘する。さらに「言わない」を「ユワナイ」と発音すること、「ユッテ」とほとんど同じくらいひろまっている」とする。今から30年以上前に、「ゆっ(て)」や「ゆわ(ない)」の方がむしろ優勢であるとする指摘は注目される。もしそれが事実であるならば、テレビドラマでは、実際の日常会話よりも「い」が保持されていることになる。

「ゆ」が普及する理由については、終止形の発音(すなわち「言う」の「ゆう」)からの類推によるものであるとする。確かにそれもあるだろうが、先に示したような音声学的な理由も考えられる。むしろ、まずそれが先にあり、その後類推が働いたと考えるのがより妥当であるように思われる。

日本語の新しい表現を網羅的に示した井上史雄・鏈水兼貴(2002)には「ユッタ」が立項されている。今から30年ほど前に実施された全国調査にもとづきさまざまな新しい表現の分布を示した井上史雄・荻野綱男(1984)のうち「ユッタ」の言語地図を根拠として、分布域を「主に東日本」とする。また、普及の理由については「終止形「いふ」が「ゆう」と発音されるので語幹をそろえる変化が起きた」とする。言葉の一部に変化が生じたことにより整った体系がくずれたことから、別の形でその体系を再度整えようという力が働いたという考えであろう。さらに「ユワナイ、ユイナガラ、ユエバ、ユエ」にも及ぶ方言がある」とする。逆に言えば、共通語において「ユ」は「ユッタ」にとどまっているということを暗示しているようであるが、テレビドラマのセ

リフの分析によれば、「ユワナイ」は「ユッタ」以上に「ゆ」への変化が進んでいる。なお、「ユイ」についての言及が特になく、点は、「ユイマス」とか「ユイマシタ」などは当時もなかったということであろう。

今回の調査では、「言う」の語幹「言」の「い」から「ゆ」への変化をとらえる最初の試みとして、岡山市でのアンケート調査とテレビドラマのセリフの分析を行った。ただしアンケートは「意識」という観点からの調査であったし、テレビドラマのセリフも、「ゆ」か「い」かはおそらくそれほど意識して発話されていないと推測されるものの、それでも「セリフ」という制約があった。今後は、実際の会話を多数収集しそれを分析することで、文字どおり実際の使用に迫っていく必要がある。その一方で、今回の調査はいずれも比較的小規模なものにとどまったことから、今後はさらに大規模な調査へと展開し、より安定した形で実態を把握するとともに、話し手の属性等からの分析により「い」から「ゆ」への変化をより詳細にとらえることも必要である。さらに、テレビドラマのセリフの調査によれば、活用語尾が「う」である「言う」の語幹は「ゆ」で安定していたが、非常に丁寧に話す場面では、現在でも「い」が現われるのではないかとも思われる。会話の「場面性」という視点も取り入れた展開が望まれる。

参考文献

- 井上史雄・荻野綱男（1984）『新しい日本語・資料図集』（科学研究費補助金報告書；非売品）
井上史雄・鍵水兼貴（2002）『辞典〈新しい日本語〉』（東洋書林）
ヤマサキセイコー（1984）「「言う」と「結う」」『カナノヒカリ』745

（おざき よしみつ／本学教授）

キーワード＝「言う」、「ゆう」、発音の変化、岡山市、テレビドラマ